

先生たちの思いを重ね合わせ、 新たなチャレンジに向かう学校

改革のテーマは学校によって異なりますが、原動力になっているのは、それを支える先生方の“思い”。一人ひとり異なる生徒たちや教育への思いを重ね合わせ、改革の流れをつくっている高校の事例を紹介します。



写真左から、研究開発部の川元隆一先生(指導教諭・英語)、松永 猛先生(数学)、藤掛真代先生(学校司書)、森 孝文先生(生物)、菊川雅子先生(主幹教諭・家庭科)

CASE 1

鹿本高校
(熊本・県立)

先進的な取組も「いずれ形骸化する」、この壁を越えるために

クロスカリキュラムを軸とした「授業改善」で「職場の対話」と「生徒の学びのつながり」を促す

学問のつながりを感じて
横断的に活用できる人に

熊本県立鹿本高校では、生徒が仮想の市の職員として課題解決に挑む「バーチャル市役所」など、総合的な学習の時間(以下、総学)で先進的な取組を行ってきた。その伝統は今なお健在だが、主幹教諭の菊川雅子先生はあたる課題も感じていたという。

「活動内容がしっかりとあることで、逆に引き継ぐ先生たちが、その活動についてよく考え議論する機会を逸していた部分があったのです。『なぜこれやるのか』という目的が曖昧になり、負担感が増し、形骸化しはじめていないかと感じていました」

一方、教科の授業については別の課題を抱えていた。生徒の授業評価が、低学年ほど低く、校長先生としては「中学校で協働学習などが増えているのに、対し、本校の教科の授業は講義中心で、入学した生徒の意欲を削いでいるのでは」と分析していたのだ。

両者にまたがる「生徒の課題」もあった。総学や各教科の学びが、生徒のなかでは別々のもので「つながっていない」。社会に出たら、さまざまな知見を横断的に活用していくのに、その土台が築かれていないのだ。

そこで校長先生の呼びかけの下、全校で取り組んだのが、クロスカリキュラムを軸にした授業改善だった。ねらいは二つあった。

一つは、生徒に「学問のつながり」を感じてもらい、学んだことを横断的に活用していく力を育むこと。

もう一つは、クロスカリキュラムを起点に「職場の対話」を増やし、何のために何をするのか、日々の教育の目的や活動を、みんなで改めて形づくることだ。指導教諭の川元隆一先生はその目指すところを「先生たちがやらされ感を抱かず、『自分たちで創った』という実感をもって活動を行うこと」と表現する。また、菊川先生は、2019年度から始まった総合的な探究の時間(以下、総探)も見すえた取組であると言及した。

図1 2019年度のクロスカリキュラム授業例

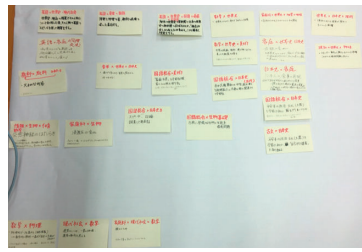
※TT……チームティーチング

	形式	クロスカリキュラム学習内容
5月	【TT形式】 物理×体育	「100mを速く走るには？」 100m走のタイムを数カ所で計測、計測結果を基に走るときに意識することを話し合い、ワークシート記入、実践
10月	【リレー形式】 数学×物理×体育	「ボールを効率的に飛ばすにはどうしたら良いか？」 ボールを飛ばす角度や初速を変えた飛距離をパソコンでシミュレーション、体育でバッティングマシンを用い実践
11月	【TT形式】 英語×化学実験	「身近な物質のpH」 英語で化学実験「中和滴定」に取り組み、表現の違いや共通点にも注目する(県内の化学専門ALT招聘)
11月	【リレー形式】 数学×家庭	「ベストなスロープを提案しよう」 家庭科で学んだ「パリアフリー法」の基準を満たすスロープを三角比を用いて計算し表現する
12月	【教科横断型ジグソー法】 生物×化学×家庭×倫理×国語×保健	「バイオテクノロジーを考える」 生物の授業で実施。生徒が放課後等を活用して、バイオテクノロジー活用分野に関する教科担当者から関連内容を学び、再度、生物の時間に多角的な視点で情報共有
12月	【TT形式】 英語×物理実験	「What is heat?」 英語で物理実験「ブラウン運動」に取り組み、表現の違いや共通点にも注目する(県内の物理専門ALT招聘)

英語のクロスカリキュラムでは、化学や物理など組む教科に合わせて、川元先生がその分野に通じるALT(外国語指導助手)を探して招聘。ALTの新たな可能性を切り拓く取組としても注目された。また、授業ではクロスカリキュラムに限らず図書館を最大限活用。学校司書の藤掛真代先生は、「研究開発部に入り、授業に使える本を他校などからも借りて提供しやすくなった」という。また、「部活のためなど自発的な調べ物でも本を借りる生徒が現れた」そうで、それが嬉しいという。

「校長先生を中心に『一緒に創り上げるプロセスが大事ではないか』という話を創る。さらに、生徒からの問いに対して、

各教科の先生たちが正解はわからないけれども一緒に考えて答えを見つけていく。つまりは生徒とも一緒に授業を創る、それが総探になると思うのです」



クロスカリキュラムのアイデア出し。校長先生がこの取組にける思いを語ったあとで、若手の先生が中心になって複数の教科の知見を生かせるような授業テーマを考えた。



写真左は、各教科主任を交えたクロスカリキュラムの年間計画の作成。写真右は、物理×数学×体育の授業で、ボールを飛ばす角度や初速をシミュレーションしているところ。

教科を越えて話し合う場を
若手の先生を中心に創出

具体的には何をどう進めたのか。
1年目となる2018年度には、「高校生に「一番感覚に近い」として抜擢された若手の先生6人前後が、夏休みに数回集まり、クロスカリキュラムのアイデア出しを実施。そこで出た64の授業案を、今度は各教科主任も交えた会議で、教科バランスや時期も考えて、10案程度に絞り、次年度の計画に盛り込んだ。翌2019年度には「研究開発部」を創設。授業改善・クロスカリキュラム

総探・図書館活用の4テーマを研究する校務分掌だ。各学年から若手の先生が2人ずつ、そこに学校司書、菊川先生、川元先生も加わり、毎週、「コマ」を使って全員で話し合う時間を、時間割の中に組み込んだ。
また、時間割には「総探の研究の時間」と称する「コマ」も設け、こちらでは学年団ごとに先生たちで集まり、授業のことを話し合うようにした。
そうして、研究開発部にも学年団にも所属する若手の先生を中心に、授業改善の対話を全校に広げた形だ。
これらの取組には「忙しくなる」との反発もあった。だがベテランの先生が「せっかくながら若手が一生懸命考えてくれたのだから、やれることはやりましょうよ」と呼びかけてくれたという。次第に、若手を中心に発案し、それを経験豊富な先生が肉付けなどでサポートし、みんなが授業改善に取り組みむ空気ができていった。
その空気を、研究開発部のクロスカリキュラム担当の森 孝文先生と、部長の川元先生が一層後押しする。
「クロスカリキュラムや授業改善を重たく感じず、みんなが気軽にできるようにしたかったです。そこで『細かい指導案なんていりません。この先生と組んだら面白そうぐらいから始めましょう』と言って、僕もほとんど意見を出しませんでした。実践後は記録を残し、今後参考にできる資料は蓄積するようにして」(森先生)

発部の会議や、総探の研究の時間に、おのおのが発案して周囲から意見をもらおう、ということですね。そうすると授業案が『みんなで作ったもの』になるわけですね。(川元先生)
実際、研究開発部の松永 猛先生は、複数の教科と組んで「世の中のことを数学で捉える授業」を創ってきたのだが、「毎週、議論できる人がいたので頓挫せずに進められた」と語る。
「他教科の先生も、同じ数学科の先生も、準備を手伝ってくれださったんです。僕の提案を、後日、ベテランの数学の先生がご自身の授業により高いレベルで取り入れてくれたこともあります。嬉しかったです」
対話による情報共有を
多様な先生が求めていた
実はクロスカリキュラムに注力することは、当初、研究開発部の先生でさえ疑問を感じたそうだ。森先生は、校長室に直談判に行ったほど。
けれども、「職場の対話」を増やすねらいもあると校長先生から聴いて、それぞれが自分の中の思いと重ね合わせて、共鳴したのだという。
「20代半ばから『俺は教科書を教えるために教師になったのか?』と自問するようになり、学校の在り方も正直『これでいいのか?』と思っていたんです。先生同士の対話のためならやりたいと思えました」(森先生)

「本校に来る前、教育センターにいた際に『これからの授業は、知識理解とともに、資質・能力の育成を同時に行う必要がある。教え込むことのできない資質・能力をどのように育成していくのか?』と強く思うようになり、このテーマをみんなでもっと話し合ったんです」(菊川先生)
「『優秀な教員だけ集める組織』を目指すより、『今いる教員が互いの考えに耳を傾け、それぞれの強みが最大限に生かされる組織』にできたら、と思っていたんですよ」(川元先生)
そうして対話を重ねた結果、先生たちの授業への認識も深まった。
「クロスカリキュラムは一つのテーマからいろいろな学問に枝葉を伸ばします。一方、課題研究の総探は、いろいろな学問を集約して一つのテーマを考えます。ちょうど逆の流れなので、クロスカリキュラムを経験すると、総探では生徒が教科横断をしやすくなるんじゃないかと。各教科と総探の橋渡しの存在になることがわかってきたんです。今はこうした授業のつながりをさらに強めようと、総学からの蓄積がある総探の活動も見直そうと話し合っています」(森先生)
今後の展望としては、川元先生は「研究開発部がなくてもいい環境——先生たちも生徒たちも普段から生き生きと対話をする学校にしていきたい」と思っているそうだ。松永先生は、「入試の変化などに対応しつつ、軸としてはぶれない柱を自分たちで築いていきたい」と考えている。